

東郷村報

第82号
昭和33年9月5日
発行所
宮崎県東臼杵郡
東郷村役場
日向市富高
安藤印刷所
電話 64番

ふるさとの
尾鈴の山の
かなしきよ
秋も
かすみの
たなびきており

牧水30周年記念号



牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長
黒木松美

燈台もと暗しと言うこと
があるが、燈台の有難さ
や、その価値は燈台のすぐ
下には判らない。

牧水先生は、明治十八年
私達の村に生れになり昭和
三年沼津市千本松原の家
に永眠されるまで、この四
十四年間の業績は誠に偉大
であり、歿後三十年を経た
今日仰げば愈々高い燈台の
様な感である。然し東郷村
の人達はそれをよく知
っているだろうか。東郷村
が牧水先生を生んだことは
何といつてもこの上もない
名譽であり誇である。然し
東郷村の人達はそれを充分
よく理解しているだろうか。

本村に牧水顕彰会が昭和
二十六年に誕生して早や七
年、私達はその足跡をふり
かえつてみると、寂寥の感
に堪えない。

先生が逝かれて今年早
や三十年、東京では先生に
関係の深い全国の知名の士
が集い、「牧水会」が設
立され、来る九月九日から
十月一日まで都内各所に於
て牧水三十年記念行事が極
めて盛大に挙行される計画
でその準備が着々進められ
ている。

私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要性を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

牧水先生の一生

明治・大正・昭和の歌壇を
通じてわが若山牧水先生は
ど広く一般から敬愛されて
居る歌人である。昭和
三年沼津千本松原の蔭の家
に長逝されてから本年は満
三十年、先生の歌は益々ひ
ろく愛誦されて

幾山河越えさきゆかば寂
しさのはてなむ国ぞけふ
も旅ゆく

い。牧水先生こそは日向の
最大の誇であり、先生を生
んだことよって東郷村は
永遠に文化日本の聖地の一
つとなつたのである。

晴れた日も悪くはない
が、私の家の眺望は雨の
日が特にいい。それは雲
と山との配合が生きて来
るからである。元來この
尾鈴山はその南面の太平
洋に臨んだ方が極めてな
だらかな傾斜が高まって
来て四千尺近い頂上とな
り、急に北に面して削り
落した様に岩骨を露はし
ながら峻しく切れてゐる

始んど登校しなかつた。そ
して二番目の姉トモの主人
今西吉郎が校長をしている
羽坂尋常小学校に転校し、
山陰の叔父純曾の家から通
学することになった。その
秋一家と共に坪谷に引揚
げ、坪谷尋常小学校に入学
した。学校は小さなもので
同級生も男女合せて二十人
位、その中で先生は成績優
秀な模範児童であつた。

明治三十七年春、二十歳で
中学を卒業、四月上京して
早稲田大学文学部等科に
入学し、まもなく尾上柴舟
先生を訪ねて師事、やがて
柴舟先生を中心に正富汪
洋、前田夕暮等と車前草社
を結び、主として雑誌「新
声」にその作品を発表する
ようになった。その頃先生
は将来は小説家として立
とうと考え、しきりに短篇小
説など書いていたが、恰度
文壇は自然主義の擡頭期だ
つたのでいちはやくその影
響を受け、そのため歌も現
実を直写する清新な詠風
になり、それが次第に歌壇の
注目を受けるようになって
来た。

あわただしく帰省した。父
の病氣はしばらく小康を保
つていたが、十一月十四日
行年六十八で遂に長逝し
た。先生は七月の帰郷以來
近親たちから郷里にとどま
つて就職することを勧めら
れてしたが、父の死後は更
に強くなり、翌大正二年五月
遂に意を決して出郷するま
でひどく苦悶懊悩してい
た。第六歌集『みなかみ』
所載の破調の歌はその頃の
作である。

私の生れた村、詳しく云
へば日向宮崎県東臼杵
郡東郷村大字坪谷村は山
と山との間に挟まれた細
長い峡谷である。ことに
南には附近第一の高山で
ある尾鈴山がけはしい断
崖面を露はして眼上に聳
えてゐるので、一層峡谷
らしい感じを与へて居
る。村の長さは東西に延
びて四五里もあるだろう
が、戸数は僅か二百か三
百足らずのものであると
思ふ。私の家はその一番
戸であつた。(今は三番
地と呼ぶ事になつてゐる
相だ)つまり村の東の入
口に當つてゐる。此処に
新たに家を建てた事に就
いても私は祖父を並なら
ぬ人の一つに思はざるを
得ぬのである。それはそ
の場所が附近でも際立つ
て優れた好位置にあるか
らである。或は他に理由
があつたか、若しくは偶
然であつたかも知れぬ
が、私には矢張りそれが
彼に山川を見る眼があつ
た故だと思はれてな
らない。家は村を貫通す
る唯一の道路に沿ひ、真
下に溪に臨んで居る。そ
して恰度その溪は其処ま
で長い滝の様になつて落
ちて来た長い、瀬が、
急に其処で屈折して居る
ために其処だけ豊かな淵
となり、やがてまた瀬と
なつて下を走り、斜め右
と左へと末遠くその上下
の溪を展望する事が出来
る地位にある。彼はその
自家に名づけて省淵と
呼んだ。膳籠入の箱など
にまで省淵と書かれて
き散らしてある。そして
村の眺望の基調を成して
る尾鈴山は殆んど正
面に、而してまたやや斜
めにその全體を眺め得る
様な地位に當つて居る。

坪谷の風光がいかによく
写されて居る。
先生の生れた明治十八年八
月二十四日は「おもひでの
記」には陰暦ではお盆の十
六日に當つてゐたさうだと
あるが、暦を調べてみる
と、實際は七月十五日の朝
で、後の山統きになつて
いる東の丘の上からすが
がしい夏の朝日が板縁に流
れて来はじめた頃であつ
た。

当時、父立蔵は四十一歳、
母マキは三十八歳であつ
た。そして先生にはスエ、
トモ、シツ(本名キウ)の
三人の姉があり、上の二人
はもう十八と十六とだつた
が、彼女たちはその愛読し
ていた「東京絵入新聞」の
続き物案一女編「龍影墨画
筑波根」の主人公の名か
ら思いついて可愛い弟に繁
という名をつけた。何しろ
初めての男の子のこととて
先生は随分可愛がられて大
切に育てられた。

明治三十二年春高等小学三
年を卒業した年に初めて延
岡に県立中学が設立された
ので入学試験を受けて及
第、延岡中学生となつた
が、二年生頃から盛んに文
学書に親しむようになり、
三年生になつてから散文を
書いて「東京絵入新聞」に
書いたり歌や俳句を作つて
校友会雑誌に出したりまた
「中学文壇」その他の雑誌
に投書をはじめ、三十五年
には級友たちと「曙会」を
起して「曙」という回覧文
学雑誌を出し当時宮崎から
出ていた「日州独立新聞」
に盛んに投書を初め翌年か
らはまた「野虹」という回
覧の短歌雑誌を出したりし
はじめた。中学時代「桂
露」「雨山」「野百合」と
いうような雅号を順次に用
いてきたが、三十七年の初
めあたりから「牧水」を使
いはじめた。母親の名マキ
と水と、当時最も愛してい
たもの二つを取つたのであ
つた。

あわただしく帰省した。父
の病氣はしばらく小康を保
つていたが、十一月十四日
行年六十八で遂に長逝し
た。先生は七月の帰郷以來
近親たちから郷里にとどま
つて就職することを勧めら
れてしたが、父の死後は更
に強くなり、翌大正二年五月
遂に意を決して出郷するま
でひどく苦悶懊悩してい
た。第六歌集『みなかみ』
所載の破調の歌はその頃の
作である。

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

必要を感じるのである。
必要を感じるのである。
私達郷土の後輩がなさね
ばならぬことは何よりも先
生に最も縁の深い坪谷の生
家の完全な保存と遺品や遺
墨著作等を出来るだけ多く
蒐集しこれを保存すること
であり更に先生の残された
自然と人生を愛する偉大な

たことで、日に幾人とな
い人たちが押掛けて来る
ので、来れば即ち酒で、
これには開口しきつてあ
る。この四月三日には大
郷村(坪谷村)のほかに大
字が三つある。全体とし
ての歓迎会が開かれるの
だ。何だか滑稽に
さへ考へられる次第だ
が、御無理御尤もで服従
するはかない有様だ。
と記して居るが、その村
人たちの歓迎会は予定通り
四月三日夜村内の船山旅館
という小さな旅人宿で開か
れた。初め発起人たちが相
談に来た時、先生はその厚
意を謝した後、自分の今日
あるは殆んど皆母の力であ
るから、恐縮だが母をい
緒に招待して貰えないだろ
うかと申し出た。勿論それ
は快諾されて、当夜は母親
と共にその晴の歓迎会に臨
んだのであった。発起人を
代表して坪谷郵便局長那須
九市氏の歓迎の言葉があ
り、先生も鄭重な謝辞を述
べたが、出席者は坪谷の人
たちを主に村内の有志旧友
たち三四十名、村としては
まことに空前の催しであつ
た。牧水先生の感慨もさる
ことながら、共にその席に
列した老母の感慨はどうで
あつたらうか。会が終り発
起人たちと共に家に帰ると
そこには鹿兒島方面の弟子
数名と村の文学好きの青年
たちが待ち構えていて、す
ぐさま酒に酔ひながら、上機
嫌の先生は一同の望むがま
まに立ち上つて自作の「ふ
るさと」の尾鈴の山のかなし
さを秋の霞のたなびきてを
り」を朗誦はじめたが、
「かなしさを」まで朗々と
やつて来たとき、急にびた
りと声を呑んでしまい、一
同がいかにせがんでも遂に
その歌の続きをやらなかつ
たという。思いがけぬ村人
たちの歓迎会に臨み、その
席から帰つたばかりの先生
は恐らく十数年前その歌を
作つた当時のさまさまなこ
とを憶い出して万感こもこ
も胸に到り、ひそかに涙を
呑んだのであつたらう。
とにかくこの時の帰省はい
わば故郷に錦を飾つたもの
であり、いま坪谷神社に残
つて居る。

吉の両君この板を持参し
て氏神に奉る歌書けとい
ふすなはち氏子の一人
うぶすなのわが氏神よと
こしへに村のしづめとお
はすこの神
という類や、裏面に「矢野
寅吉おちやんに贈る歌 お
となりのしげ坊」と記し
た
おとなりの寅吉おちやんに
物申す永く永く生きてお
酒飲ませませよ
という愉快な短冊などの揮
毫もこの時の滞郷中で、ま
つたこれこそは先生の一
生の一度の晴の帰郷だつた
といつてよからう。
四月十二日には父の十三回
忌の法要を営んだ。そして
老母を口説き落して沼津ま
で連れ出すことに成功し、
四月十六日の朝、馬車で故
郷を発つたが、老母は沼津
滞在一カ月ばかりでまた坪
谷に帰つた。
牧水先生はその後短冊半折
等の揮毫頒布会を各地に催
して得た金で沼津千本松原
の陸に土地を買い家を建
て、以前からずつと主宰発
行していた『創作』の他に
詩歌綜合雑誌『詩歌時代』
を発行したが、その雑誌の
ため少なからぬ負債が出
来、更にずつと揮毫頒布旅
行を続けねばならなくな
り、遂に北海道朝鮮まで出
かけた。先生がその次に帰
省したのは昭和二年の朝鮮
旅行の帰途、大分延岡での
揮毫頒布会を分ましてから
で、七月二十五日に喜志子
夫人同伴で坪谷に帰つたの
であつたが、この時は非常
に疲れきつていて半病人の
有様、それも父の墓参を
したり郷里の写真十数枚を
撮らせたなりなどして二十九
日土々呂港を出帆したが、
これが最後の帰省であり、
翌三年九月十七日、沼津千
本松原の陸の家で永眠、同
地浜道乗運寺の墓地に埋葬
された。
法名 古松院仙普牧水居士

故郷の歌・懐郷の歌

○歌集以前

天のししのさびつ青葉山
青葉に白し一すぢの滝(窓
前の景を詠める)
幾たびか寝ざめやしき山
宿の固き枕に秋の雨きけ
(神門あたりをさまよいて
る頃)
子規啼きぬ今宵のおん夢に
わが去ぬると入りしやい
かに(郷に帰る日舟より母
に)
ふるさとや桃薄紅の実をつ
けてうらぶれ人の我むかへ
けり
ほととぎす鳴くよと母に起
されてすがる小窓の草月夜
かな
父と寝ね母と起きいづるふ
る郷の山家このころ鹿のこ
えかな
草の実に木の実に秋のめぐ
りては小鳥よく鳴く故郷の
山
ふる郷の梨の古樹を撫でて
見つをさなきわれと逢ふこ
ころし
ふるさとを秋を澄む月翌日
立たぬが衣うつ母に照る
かな
夕霧はしづかにふりくる
夕霧はしづかにふりくる

さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき
さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき

さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき

さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき



牧水先生の生家

さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき

さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき

さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき

さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき



さくら早や昔戸の山辺に散
りゆきしかの納戸にや臥し
たまふらむ
病む母のまくらにつどひ泣
きぬれて姉もいかにかわれ
を恨まむ
病む母を眼とちおもへばか
たはらのゆふべの膳に酒の
匂へる
父おほく家に在らざり夕さ
ればはやく戸を開し母と寝
にける
ふるさと山のおくなる山
なりきうら若き母の乳にす
かりき